

自由論題 5「人の移動と組織形成」・報告 2

報告テーマ

戦前、戦後期の留学生受入れと国際学友会の役割

“Role of Kokusai Gakuyukai (International Student Institute) in the Acceptance of International Students Before and After the War”

氏名(所属)

佐藤由利子(東京工業大学)

要旨(800字程度)

1935年に創立された国際学友会は、外務省文化事業部第三課が所管し、国の文化事業の一環として、非漢字圏地域からの留学生受入れと世界各地との学生交流を展開した。しかし、太平洋戦争が始まる中、1942年11月には大東亜省の所管となり、占領したインドネシア、フィリピン、ミャンマー、マラヤ、ベトナム(安南)や友好国タイからの南方特別留学生の受入れが中心となる。

戦後は、補助金も途絶える中、独立戦争により帰国できなかったインドネシア人留学生を始めとする残留した南方特別留学生や、満蒙中国留学生関係補導3団体から引き継いだ留学生を抱えて苦闘していたが、1952年4月のサンフランシスコ講和条約発効により独立を回復して以降、東南アジア諸国等への経済協力が開始され、タイからの留学生なども来訪し、人的交流が復活し始める。

しかし、1954年に開始した国費留学生の予算が外務省と文部省の覚書文書にもかかわらず、文部本省の予算として計上され、1957年3月に国費留学生の世話団体として、財団法人日本国際教育協会(AIEJ)が設立され、1954年4月に発足したアジア協会が、技術研修生の受入れを担当するなどの環境変化の中、国際学友会は、私費留学生と各国政府派遣留学生の世話団体としての役割に特化していくことになる。

本発表では、国際学友会が保有する学生会員名簿などの留学生史料や外交文書などから、戦前、戦後期の留学生受入れと、東南アジア諸国との友好促進に果たした国際学友会の役割について分析する。